

## 『ひょうご歴史研究室紀要』第七号の刊行にあたって

ひょうご歴史研究室の七年目を終えようとしています。この七年の歳月は、本誌紀要にも彩をもたらしめています。

その一つは、『播磨国風土記』 研究班、赤松氏と山城研究班、たたら製鉄研究班の三つの研究班ごとに、その成果を並べるといふ誌面構成をとっていたのが、第五号（令和二年三月刊行）から、年代順に掲載するようになったことです。もともと『播磨国風土記』 研究班はおもに古代、赤松氏と山城研究班は中世、たたら製鉄研究班は近世を中心とする認識があり、時代区分が背景にありましたが、研究の進展によって相互に入組むようになってきたからです。ひょうご歴史研究室が、文献史 おもに文字資料を活用する と、考古学 おもに非文字資料を扱う という二つの研究手法を取っていることも、その交流を促したといつていいでしょう。

二つには、目次に記されている論文・研究ノートなどの柱が、増えてきていることです。第一に論文、第二に研究ノート、第三にフィールドレポート、第四に歴史遺産活用、第五に成果の窓、第六にひょうご歴史研究室活動記録が、既刊号には使われていますが、本号にはさらに第七として史料紹介、第八として書評が加わりました。史料紹介は、淡路島文化財総合調査のデータ整理をする中で注目され、現地での史料調査によって発見されたものです。そして書評は、第六号として特集号『播磨の道』が刊行されたことによるものです。

三つには、執筆陣の拡大があります。基本的には末尾に掲載されたひょうご歴史研究室構成メンバーが、本誌の執筆を担っているのですが、研究活動の活性化によって、外部の研究者からの寄稿が目立つようになっています。特集号はその画期でしたが、本号でも書評の中村太一氏、論文の上村武氏がそれに当たります。ひょうご歴史研究室の活動が、県内外に広がっていることの表れだと考えます。

なかでも執筆者で注目されているのは、歴史遺産活用のコーナーです。なぜならそこには、貴重な歴史文化遺産を町づくりや教育普及に活用されている市町の行政のトップの名が見えることです。本号には南あわじ市の浅井伸行教育長から玉稿を頂きました。ご執筆いただきましたすべての皆様にご心よりお礼申し上げます。

さて、ひょうご歴史研究室の七年の歳月は、その蓄積と同時に、前途に向けた課題をも浮かび上がらせています。一定の期間を区切りに、定期刊行物とは別に、まとまった成果を発信することの必要性です。本誌『ひょうご歴史研究室紀要』は、非売品であり、内容も専門的なものが多く、広く市民一般に受け入れられるには敷居が高いと言わざるを得ません。そこで、市民が手に取れる形での成果の発信が求められたのですが、昨年一月、ひょうご歴史研究室編の『播磨風土記』の古代史が神戸新聞総合出版センターから出版されました。四六判二七〇頁、定価一八〇〇円という図書で、ひょうご歴史研究室研究コーナーディネーター坂江渉氏ら一七名が執筆しています。まさに『播磨国風土記』研究班の研究の成果の集大成といえるでしょう。

好評をもって迎えられているようですが、令和二年から始めている公益財団法人・兵庫県芸術文化協会とひょうご歴史研究室共催の「ふるさとの歴史講座神戸校」の講座では、参考文献として取り上げられ、市民の方々とともに風土記を学ぶ機会となります。

こうした市民向けの図書の出版は、ひとつの集約の方法ですが、いまひとつ、県民への還元の方法として、兵庫県立歴史博物館主催の行事「歴史文化フォーラム」があります。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でこの二年、開催できないでいます。淡路島日本遺産委員会と共催のシンポジウムも然りです。新型コロナウイルス感染症の終息を待つほかないというのが実情です。

いま一つ懸案の課題として、博物館での展示という形で、ひょうご歴史研究室研究の調査研究の成果を開陳することが挙げられます。とくに望まれているのは、ひょうごの「たたら製鉄」です。わたしども兵庫県立歴史博物館でも、いまだかつて開催しておりません。しかし近年、史料集の刊行があり、製鉄遺跡の学術的評価、さらにたたら製鉄復元の取組みが行われるなどを通じて、県民の間での関心の高まりがみられます。近い将来、ひょうごの「たたら製鉄」が、歴史博物館の展示として県民の皆様にご覧いただく機会があるだろうと館長として期待するところがあります。

今後ともひょうご歴史研究室へのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和四年（二〇二二）三月 兵庫県立歴史博物館館長兼ひょうご歴史研究室室長

藪田 貫